

監訳のことば

本書は、「患者中心の医療 (Patient-Centered Medicine : PCM)」について、そしてそれをどのように臨床、教育、政策、研究で応用していくかについて書かれた専門書『Patient-Centered Medicine : Transforming the Clinical Method』第3版の全訳です。単にPCMの理論とモデルを示すだけでなく、それを現場の実践へ落とし込む「方法」が豊富な研究エビデンスとともに示されているので、邦題はその方法の名称である『患者中心の医療の方法』(Patient-Centered Clinical Method : PCCM) としました。著者は、家庭医療学を独立した学問分野として確立させたカナダWestern大学の故Ian R McWhinney名誉教授と、彼の薰陶を受けて40年近くにわたりPCCMを発展させてきたこの領域の世界的リーダーたち – Moira Stewart教授、Judith Belle Brown教授、W Wayne Weston教授、Carol L McWilliam教授、そしてThomas R Freeman教授 – と彼らのチームです。1992年に家庭医療専門研修の一環としてMcWhinney教授のもとで家庭医療学を学んだ私は、当時PCCMの理論がこのチーム内の議論によって大きく発達するのを目の当たりにしていました。著者紹介からわかるように、彼らのバックグラウンドは家庭医だけではありません。当時から多職種のチームでPCCMに取り組んでいたところにも成功の鍵がありました。その後、理論だけでなく、臨床、教育、そして研究面で多くの実を結び、さらに政策へのインパクトをもつまでに発展したPCCMとは何で、なぜ日本にも必要なのかを、本書によって広く日本語で理解してもらえることは私の大きな喜びです。

この日本語版を作る翻訳プロジェクトは、日本プライマリ・ケア連合学会の若手会員の有志、通称「翻訳研究会」のメンバーがいなければ成立しなかったでしょう。彼らから「海外のプライマリ・ケアの専門書を翻訳しながら精読して学びたいけれど、何がよいか」と問われて本書の原書を推薦したことが始まりでした。彼らが分担して熱心に作成した試訳を共有し、しばしば深夜におよぶオンライン会議で議論と推敲を続け、できあがった改訂版に私が校正を加えました。ですから、現時点の日本でPCCMを最も理解しているのは彼らでしょう。「若手」だった彼らも、もはや中堅の総合診療・家庭医療指導医です。ぜひ、今後はこの日本語版を活用して、彼らの次の「若手」たちを含め多くの人たちに、彼らが深く学んだPCCMを広めていってほしいと願います。

現在のコロナ禍が来る前、2019年11月にカナダのトロントで北米プライマリ・ケア研究グループ (NAPCRG) の年次学術総会が開催されました。今までのところ、あれが最後の対面開催の国際学会参加になってしまいましたが、大会長を務めたJudith Belle Brown教授とも、そしてMoira Stewart教授、Thomas Freeman教授とも親しくお話しをする機会がありました。故McWhinney名誉教授の思い出から始まり、PCCMがこれから挑む課題、そして日本で

本書が読まれPCCMが受け入れられることへの期待まで、話は尽きませんでした。

翻訳については、意訳ではなくできるだけ英文に忠実に訳出するように心がけました。そのため、日本語として不自然なところもありますが、どうぞご容赦下さい。どうしても意味が理解できない英文については、私の講座の同僚である英国家庭医学会正会員・専門医(MRCGP)のMaham Stanyon助手と議論して、どのような日本語に訳すかを検討しました。彼女の多大な貢献に感謝します。時にはネイティブ・スピーカーの彼女にとっても難しい言い回しもあり、それらについてはできるだけコンテキストに添って著者の意を汲む努力をしました。

総合診療分野ではまだ少ない専門書の日本語版出版を決断して、監訳の過程を支援していただいた、羊土社編集部の久本容子氏と林理香氏に深く感謝します。どうもありがとうございました。

2021年3月

福島にて
葛西龍樹